

## ■ ムーブル・パリは少し違っていた

今年の1月のパリはいつもより寒く、その分牡蠣がとてもおいしかった。

2006年1月5日~9日までパリで開催された、国際家具見本市 Salon du Meuble de Paris 2006 (ムーブル・パリ) に、IPEC21-2005 が3度目の出展をした。

IPEC21 (INTERIR PRO EX CO) は「インテリアのプロと企業をつなぐ国際展示会とセミナー」で、インテリアを総合的に捉えた日本で唯一で初めてのインテリアのエキジビションである。2001年より開催され、昨年で5回目を迎えた。

IPEC21 は、インテリアの業界団体が主催する他の展示会とは違い、インテリアの資格者団体である、JIPA/日本インテリアプランナー協会の主催による、他に例を見ないエキジビションである。その中で、デザイナーによる空間やプロダクトのデザイン提案やアイデアを、インテリアの関連企業とのコラボレーションにより実現し発信する「デザイナーズ・ショーケース」という企画展示を2003年より開始し、この企画に賛同したムーブル・パリの主催者より誘われ、今年も3回目の出展をすることとなった。

ムーブル・パリは毎年1月に開催され、47年の歴史を持つヨーロッパ4大家具見本市のひとつで、クラシックとモダンの展示が特徴である。今年も、世界各国より650社の出展があり、38,000人の来場者が訪れた。数ある会場のなかでも、コンテンポラリー・モダン展示ホールの「メトロポール」は、現代的で新しい、意欲的で興味深い作品展示が行われていて、毎年質の高いデザインの発信の場となっている。

この「メトロポール」に、今年もIPEC21 は例年のような単独の出展ではなく、「NIPPON DESIGN」パ

ビリオンと共に展示をした。日本の「今」の生活を総合的に、多方面から紹介するこのパビリオンでは、インテリアエレメントやプロダクトを日本からの発信として展示し、アートディレクターはデザイナーのグエナエル・ニコラ氏が務めた。

また、この「メトロポール」には、個人またはグループが新しいデザイン発信をし、各国プレスが注目している“デザイン・ラボ”や、フランスの家具業界と政府が共にバックアップし、デザイナーからの提案を受け、審査して選ばれた作品を製作して発表する“V.I.A” (コンセプトが「デザイナーズ・ショーケース」と似ている) など、毎年レベルの高い新しいデザインが発信されている。しかし、今年も出展者数が少なく、日本からも2グループの出展のみで、意欲的で興味深い作品もあったが、素晴らしい作品が多かった昨年と比べ、全体としては何か物足りないものを感じた。その中で目に付いたのは、今年初めての出展である韓国のパビリオンで、作品の良し悪しは別として、かなり広いスペースを政府の協力の下で出展しているのが注目されていた。

私たちのIPEC21 - 2005 は「デザイナーズ・ショーケース」を中心に7チームが参加した。昨年のIPEC21 で東京デザインセンターの船曳鴻紅氏と建築ジャーナリストの鈴木紀慶氏の審査により、出展された29点の中から、10点が大賞、優秀賞、特別賞に選ばれ、そのうちの6点の作品が、海を渡って展示された。

それぞれの作品は日本の「心」を表現し「和紙を使った風が流れる屏風」「家具としての畳の新しい挑戦」「折りたたみ式のコンパクトな書斎」「硝子と木と和紙のあかり」「すわる・ねるの新しい形」「ソファ形のパスタ

ブ」など、新しい発想の提案がされ、ヨーロッパの人々を魅了していた。

3回目の出展で感じることは、これらの展示を国際的文化交流としてアピールするか、インテリアのビジネスとして捉えるのかを今後は視点を定めて臨まなければならないと思っている。今回もディーラーやショップの人や一般の人々からも、購入希望が多く集まった作品や製品もあった。しかし、実際のビジネスに結び付けるには販売ルートなど、事前に周到な準備をして臨まなければ成功には結びつかない。

「メトロポール」部門以外は一般の家具やカーペットなどの展示が行われ、目に留まるものもいくつかあったが、今年も新年明けてすぐの1月5日からの開催ということもあり、昨年、一昨年のムーブル・パリに比べると70%くらいの出展に留まっていたようで、特に今年もイタリアのメーカーの出展が少なく、精彩を欠いていた。また、日本の出展も「デザイン・ラボ」に出展した前出の2グループと他のホールでの1グループのみで、とても寂しい展示であった。ミラノサローネのような賑わいとはずいぶん違った印象であった。

この後の1月下旬に同じパリで開催される、Maison & Objet (メゾンオブジェ) に日本からは25ものグループ・企業が出展する。世界の人々の関心はそちらに移ってしまったのであろうか、来年のムーブル・パリに期待したい。

このメゾンオブジェについては、船曳鴻紅さんの報告を待ちたいと思う。

それにしても、今年のシャブリと牡蠣、特にブロンはとても美味であった。

中川 誠一

## ■ IIDA セミナー 「都会を暮らす」 IIDAプレジデント 根元 美奈 アイデック 佐々木 浩美

今回は、国際的に活躍されていますファッションデザイナー・コシノジュンコさんをお招きしての「都会を暮らす」をテーマにセミナーを開催いたします。

デザイナーとしての美意識が具現化されたご自邸を中心にお話をお伺いしたいと思います。ご自身のデザインコンセプトである「対極と融和 西洋モダンと日本の伝統儀」がぎっしり詰まったこだわりのお住まいをご紹介いただけるまたとない機会です。是非多くの方々がご参加くださるようお待ちしております。

### \*オプションメニュー『コシノジュンコ邸訪問』

参加者の中から抽選で20名の方にコシノ邸訪問の嬉しい企画がプラス

- 日時:2006年4月20日(木)  
18:30 受付  
19:00~20:30 セミナー『都会を暮らす』コシノジュンコ氏  
20:30~22:00 懇親会(セミナー終了後会場移動)
- 場所:セミナー会場/六本木ヒルズ森タワー 49F スカイスタジオ  
パーティ会場/レストラン BURDIGALA
- 費用:セミナー費/振込み=¥8,000 当日の場合=¥9,000  
懇親会費/¥4,500
- 申込み締切り:2006年3月26日(日)  
※たくさんの方の参加が見込めますので、お早めにお申し込み下さい。
- 申し込み・お問合せ先/FAX:03-5772-6050  
(フォーラム担当:アイデック佐々木)  
E-mail: [sasaki@aidec.jp](mailto:sasaki@aidec.jp)

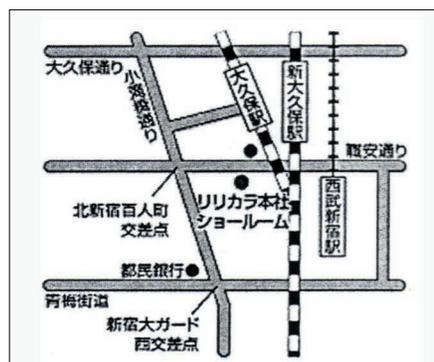
## ■ JID 関東事業支部・研究委員会・セミナー 「これからの日本の住まいとインテリアデザイナーの役割」

研究会では前回に引き続き、インテリアデザインの可能性やインテリアデザイナーの役割を探るセミナーを開催いたします。今回は、戦後日本の住空間の近代化と普及に大きな役割を果たした、旧、日本住宅公団~都市再生機構でさまざまなトレンドを構築し、現実化し、研究を重ねさまざまなプロジェクトに係わり、近年の住まいの政策にかかわってこられた小畑晴治氏を講師に招き、今後の日本に於ける住まいのあり方と可能性について氏の視点から講演をいただき、これからのインテリアデザイナーの役割と可能性についてお話をいただくプログラムを計画いたしました。ご案内をするとともに、多数のご参加をお待ちしています。

社団法人日本インテリアデザイナー協会 関東事業支部 研究委員会  
研究委員長 長岡 貞夫

- 講師:小畑晴治氏(財団法人日本開発構想研究所 理事 業務開発部長)
- 開催日時:2005年3月24日(金)  
講演/午後6時30~8時30分  
懇談会(ワインパーティー)/午後8時30~9時00

- 開催場所:リリカラ(株)ショールーム・会議室



JR 新宿駅西口より徒歩10分  
JR 新大久保駅より徒歩8分  
JR 大久保駅南口より徒歩3分  
西部新宿線北口より徒歩3分

- 参加費:一般/¥1,500 JID 会員/¥1,000  
学生/¥700 ACT 会員/¥500
- 主催:社団法人日本インテリアデザイナー協会  
関東事業支部研究委員会
- 後援:リリカラ株式会社
- 申し込み・お問合せ先  
JID 本部事務局 FAX:03-5322-6559 または、  
E-mail: [head@jid.or.jp](mailto:head@jid.or.jp) までお願い申し上げます。

## ■ 新年交流会を経て 荒井資郎

皆様、昨年新規正会員として入会しました荒井資郎です。宜しくお願ひします。まずはこのような書面で挨拶をさせて頂ける事に感謝致します。去年まで恥かしながら、私の中ではJIPATの存在が薄く、あるのならば見学会や最新情報の入手、一応入っていた方がいいかな?くらいの感じで入会しました。そこに舞込んだ新年交流会!正直申しますと、招待・香港ガーデンの二文字で決めたのは否めません。ただ確かJIDも同日新年会があったようですが、すっかり忘れていましたのでJIPAT新年交流会に一直線!会場に着くと大勢の方達!そして様々な所属で“活躍中”のツワモノ!そしてムーブ・パリのスライドがいい感じ!食事もおいしそう!早く麦の恵みを!と思っているあいだに新人の挨拶?さて何を話そうかと考えている間に順番。普通に挨拶をと思いましたが、結果多少の笑いを取りに行ってしまう事になったのはお聞きの方はご存知かと。初めてではありましたが気軽に話が出来た雰囲気の時を忘れ、その後は談笑と心地

よい時間を過ごさせて頂きました。それも会の雰囲気がおおらかなのでしょうか、ちょっとしたサロンのような、今回一人での参加にも関わらず長居をさせて頂きました。



驚いた事は、今回のような形での新年交流会が初めてという事。協会の名前からして色々面白そうな空間で、皆さんそろってされていたのだと思っていました。あとはもっと個人会員の方や、若手の方々ともお会いしてみたかったです。それは次回の楽しみにとっておきます。入会・新年交流会参加も偶然といえば偶然かもしれないですが、クラボルト氏の“ブランドハップンスタンス”

の、「人生とは偶然のかたまりで、その偶然を自らつくりだしていくことがより豊かな人生をつくりだす」という事を思い出しました。仕事・人生含め人と人の交流ではあると思いますが、偶然にもこの場所に同席して、所属立場云々をおいて、空間やそれに限らず話を出来て楽しむ事はよいなあ、などと今更思いながらお酒を頂いていました。そしてその余韻の残る帰り道、造り手としてもっと自らを磨かなくては!という思いと、新年交流会を経て、会員交流委員会への参加のお誘いなども含めJIPATがハッキリと刻まれる日でありました。長くなりましたが、JIPATが職能集団としてプランナー含め重要なものであり、そして社会に対してもプランナーという存在や役割、人や空間とのあり方を常に刺激するような発信など、今後の益々の発展を期待しております。そしてお忙しい中、会を企画し参加させて頂きかけを与えて下さった関係者の皆様にも感謝とお礼申し上げます。まだまだ年若ではありますが、今後とも宜しくお願ひ申し上げます。

## ■ 途中下車

ジャガーの座席をリビング用のソファにして欲しいと依頼があった。2ヶ月かけてお届けしたところ大変喜んで頂き、このジャガーには思い出が一杯詰まっています。そして今度はハンドルやミラーから最後には方向指示器まで出され、これを那須の別荘の壁飾りにしたいので知恵を貸して欲しいと現在宿題を頂いているところです。

人々には色々な思い出やそして気休めというのか、第3の空間がほしいことを潜在的に持ち合わせているようです。昨年11月に千葉市穴川にオープンしたINAXの

ショールームにお邪魔したとき同じ考えの若手建築家達のミニチュアハウスの展示があった。

車好きの人が目に見えるところに車を置いておける、つまり車がリビングまで入り込む生活、あるいは2世帯住宅で向かい合った建物



の空間を菜園にして楽しむ。あるいは趣味の物をランダムに壁に掛けて、住まい手が夢見る空間の提案のしかけ。これなどは今、宿題に頂いているのと同じシーンである。INAXの品を納めたとき顧客からの声があまりにも趣味趣向の多さに気づき、何か提案するものが無いかと企画を思いついたと説明があった。12日にトークイベントが開催されます。

## ■ 知って知らない道具

### 叩き出す

叩き上げる、たたき割る、叩き大工、、、等々。此の言葉は今の時代にはそぐわない、何度もなんども繰り返してやっと完成する、そんな道具を見つけに仙台までやってきました。金物を斬る処から鑿(たがね)と呼ぶ。鋳金具づくりを伝承する三代目・八重樫今朝吉氏にお話を伺った。“鑿だけで打ち出すのでたがねを、なんどもサンドペーパーで研ぎながら仕上げます、そう!鑿は自作です。鉄板を使います。



他の物だと途中で壊れてしまいます。昔は漆で仕上げましたがサビがでるので最近は焼き付け塗装にしたりします。”線画だけで始めた彫金がぼつりした「牡丹に唐獅子」が少しずつ現れてくる。幕末のころ仙台ダンスは武士のダンスといわれそれも中。下級武士用のダンスであったらしい。明治初期に指物大工になっているもので、もと仙台藩士だったものがかなりい

たそうで、武士が内職で指物をしていたので、最初は武家相手に武家用のタンスを作っていたようで、4尺たんすは「刀入れ」だそうです。一般に背は高くなく仏壇下とか窓下などに置かれた所から装飾が必要になったようです。手打ち作家は現在2人しか居なく、この彫金金具を付けた筆筒を「仙台筆筒」と呼び、特製鑄造金具(型を使って作る)を付けたものを仙台民芸筆筒と呼び分けているそうです。



## ■ 地名由来板 -1

その昔、江戸氏の館を拡張して江戸城をつくったのが室町時代の武将、太田道灌です。長禄元年(1457)のことでした。しかし、私たちがいう江戸城は、徳川家康が江戸に入府してからの城のことを云います。天正18年(1590)に家康が江戸に入り、さらに征夷大將軍に任じられた慶長8年(1603)から本格的な改修がはじまります。城の北方の神田山を切り崩し、その土を使って城のすぐ下に迫っていた海を埋め立てて城下を広げます。慶長11年(1606)から藤堂高虎の縄張り(設計)により大修築が行われた。つづいて江戸城の普請もはじまりました。伊豆から石を切り出し、石垣を築くと同時に、二の丸と三の丸が拡張されました。さらに五層の天守閣も新たに築かれました。堀はらせん状に江戸市街の大半を囲みながら浅草橋まで延びたが、その起点となったのが大手門である。この大手門は、江戸城本丸の正門にあたり、内桜田・西の丸大手の御門ととも

に三番所と呼ばれた。元和六年(1620)、伊達政宗が千両箱3箱、人夫40万人を使って、大手門の左右13町(約1400メートル)の石垣と防御用の空き地である樹形を持つ城門を改修した。(ちなみに家康公の亡くなったのは1616)城門は高麗門と渡櫓とに分かれ、高麗門をくぐると城壁に囲まれた四角い広場(柵形)があり、右正面に渡櫓が存在する。警備は、10万石以上の譜代大名が警備にあたったこの天守閣は、天守台を含めると高さ70メートル近くになり、その姿は江戸中から眺められた。残念ながら天守閣は、明暦の大火(振り袖火事とも(1657))で焼失し、ついに再建されることはありませんでした。幕末



期にも火災で本丸や二の丸を失っていたため、天皇は西の丸の仮御殿に入られ、いま新年祝賀の儀や親任式がおこなわれている宮殿は西の丸だったところで、江戸城本来の中心であった本丸や二の丸は東御苑にあたります。ここは一般に公開されていて二の丸庭園は、江戸初期の武家であり茶人であった小堀遠州作の庭園を復元したもので、みごとな作りです。この東御苑は自然のままに武蔵野の風情を残し、都心とは思えない静かでのんびりとした時間をすごすことができます。天守閣跡の石積みに上がって町を見下ろすと、かつて将軍が見ていたかもしれない江戸の風景が見えてきました。

## ■ 編集後記

町名由来板の新連載にあたり、なぜ、今、と思われる方が必ずおられると思い、この企画を思い立ったいきさつを申し上げます。“江戸開府400年”を記念して“町名由来板”なるものが千

代田区に昨年3月に完成しました。家を新築される際風水や方位等を云われる施主様がかなりおられます。そこで話題の一つにでもなればと思い企画しました。編集 井上常雄